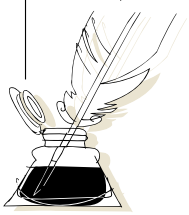
連載エッセイ183
人生讃歌

続々・愛酒日記



必要があって昔の記憶を確かめるため日記を開くと、ほとんどの日の終わりに酒を飲んだ記述があって呆れる。しかし二十代の中ごろから、酒が愚かさや失望や不安を一時的に忘れさせてくれるので助かった。ま、酒での失敗や後悔は数えきれないが、しかし酒に力づけられ助けられたこともまた数えきれないのである。人生、うまくできてると思うことにしているのである。

【某月某日】

長編小説『風少年』を書くため洞爺湖のホテルに五日間予約。出かけようとした朝、有珠山が噴火しそうとのことでとりやめ。登別温泉の第一滝本館へ予約変更しようとしたら、そこも有珠山に近いから混雑しそうとのこと。それで層雲峡の層雲閣グランドホテルへ予約替えする。その夜、有珠山噴火。二十三年ぶりとのこと。

【某月某日】

次の日、層雲峡へ。一日目に四百字詰め原稿用紙十五枚書けて上等と午後八時から酒。温泉に入って浴衣がけでの酒はうまい。二日目も十時間で三十枚と晩酌がすすむ。三日目も三十枚。午後十時に温泉に入って酒。明朝、帰るが、三日で七十五枚は予想以上と、いい気分で酔う。予定三百枚。講談社へ原稿を渡すのが五ヵ月も遅れているが、あと一ヵ月で書き上げたい。会社に勤めながらだから俺もたいしたもんだ、と自分を褒めつつ、ぐいぐい飲む。

【某月某日】

東京銀座の料亭「浜作」で北海道新聞文学賞の選考。原田康子、加藤幸子、李恢成、渡辺淳一、小生の五人の選考委員で二時間半。終わって酒宴。雑談が選考本番よりも熱の入った話題になる場合もあると感ずる。散会後、一人で近くの並木通りを歩く。ぼくは四十年前の二十三歳から九年間、並木通り七丁目にあった北海道新聞の支社に勤めていたのだった。毎晩、酒びたりで閉口したな、と苦笑する。久しぶりに新橋烏森まで歩き、居酒屋で飲む。なつかしい。

【某月某日】

文芸教育振興会の仕事で新宿から「あずさ61号」で出発、山梨県小淵沢へ。高校生への講演である。山梨日々新聞の人と小淵沢ホテルで会食。岩魚や山菜の地元料理で酒がうまく、すすめられるままに調子にのってカラオケで歌う。次の朝十時から北巨摩郡の「帝京第三高校」で「ひとりでは生きられない」の題で話す。午後二時から「甲陵高校」で話し夜、上諏訪で泊まり、信濃毎日新聞の人たち三人と会食。明日が早いのであまり飲まないよう気をつけるが、辛口の地酒が美味で、すすめられると断れない。

【某月某日】

次の日の午前九時から茅野市の「東海第三高校」で。午後、特急「あずさ53号」で長野市へ。昼食の『油や』での蕎麦づくしが絶品でビールがうまい。午後二時から「長野女子高校」で話し、そのあと松本の妻の実家へ行って妻の両親や兄弟と酒。妻は札幌から先に着いていた。妻の親の前ではつい酒を控えるが、すすめら

【小檜山 博 文学館が開館】2020年11月1日から北海道滝上町の文化センター内に、生原稿、掲載誌、文学賞、日記、写真、創作メモ、新聞記事など、70年にわたる活動資料の展示が開設されました。　紋別郡滝上町栄町（滝上町文化センター内）　☎0158・29・3735　10:00～17:00　年末年始休館（12/31～1/5）
アクセス：札幌駅からバスで約4時間30分、旭川駅からバスで約2時間30分　紋別空港から車で約40分

れるとどんどん飲んでしまう。遠慮は他人行儀でよくない。

【某月某日】

仁木町銀山の友人・永富正と瀬野淳一に誘われ、妻と余市川へヤマベ釣りに行くが川の増水で中止。近くの農園でサクランボ狩りのあと、すぐ大洞忠義の手づくりの別荘「洞夢」で十人くらいで酒宴。窓から、横を流れる幅一メートルほどの小川からヤマベを釣り上げて空揚げにする。やはり唐揚げした紫蘇の葉を揉んで粉にし、ヤマベが見えないほどたっぷり振りかける。その上に塩を振って熱いうちに頭からかぶりつく。これはうまい。うま過ぎてビールと酒がいくらでも入るから酔う。

挿絵／中江潤一

酔って四十年来の仲間と喋って歌って、ここが桃源郷である。

【某月某日】

人間ドック。肝機能のγ-GTPが60で10多い。尿酸値7でこれも多めだが、これだけ毎日酒びたりでは当然だ。気をつけよう。

【某月某日】

東京・調布市の図書館で九州の作家・山下惣一氏と「農は命」について対談。山下さんは現代の日本の作家の中で、ぼくが最も尊敬する人である。実際に農業をしながら作家活動をし、農とは人間の命を作る仕事と言い続けているからである。ぼくが貧農の子に生まれながら農業をしなかったことを詫びると、山下さんは「作家も言葉と文で人の心の命を作っているわけだから、あんた、それでいいよ」となぐさめてくれた。ありがたかった。対談のあと酒を飲みながら山下さんは、我が国の国民、約一億二千万人のうち農業人が約百六十五万人、つまり農業人がたったの約一・八％しかいないということを嘆いた。そして国が生き延びる道は食の自給だけなのに、と言った。この日の酒はうまかった。山下さんの名著『身土不二の探究』はぼくの座右の書である。

【某月某日】

何もやる気が起こらなくて、家で一日じゅうだらだら過ごした日の夜の酒も、それなりにうまい。だが朝から気合いがはいって一日じゅう順調に原稿が書けた夜の酒は格別うまい。たぶん、これだけ頑張ったのだから堂々と飲んでいいのだと思うからだろう。ということは、ふだんろくな仕事をしない日は晩酌をコソコソと遠慮がちに控えめな気分で飲んでいるということになる。なるかも知れないが、ぼくはそんなことはまったく気にしないことにしている。どんとこい、である。 Ⓙ

■小檜山　博（こひやまはく）：作家。神田日勝記念美術館名誉館長。1937年・北海道滝上町生まれ。『出刃』で北方文芸賞受賞。『光る女』で泉鏡花文学賞と北海道新聞文学賞受賞。1997年・札幌芸術賞受賞。2003年『光る大雪』で木山捷平文学賞受賞。2005年・北海道文化賞受賞。2007年・北海道功労賞受賞。